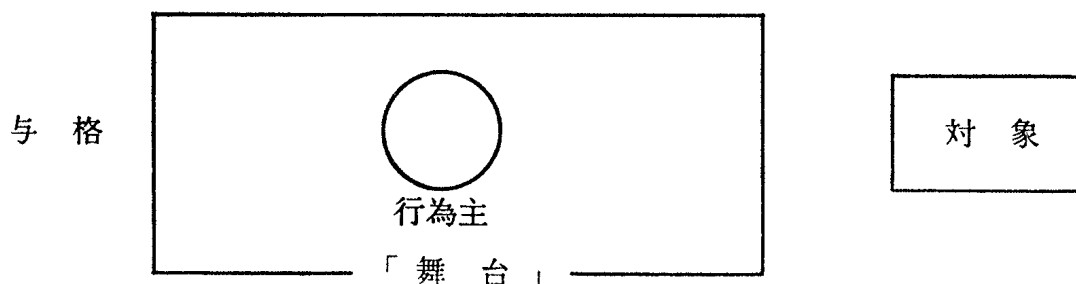


Он ждет поезда②



Она верит мужу③

①の場合、この動作を演じるためには、両者は必ず舞台上に登場する必要があるのに対し、②、③の場合、行為主だけで演じることが可能である。したがって、①の場合、対象ははっきりと見えるが、②、③では、対象のかたちではっきりと見ることはできない。ただし、②の場合、対象の位置が舞台のそでにあって、登場の可能性をも

っているのに対し、③の場合のその位置は任意であるといえる。

このように、動詞の含意する、行為主と対象との位置関係が決定する補語の見え方のちがいが、生格、与格、対格という格表示のあらわれ方に影響を与えているということができらるであらう。

アンドレイ・バールイの『ペテルブルグ』における 幻想的世界の意義

裴 大 華

小説『ペテルブルグ』のプロットにおいて、アポロンの「第二空間」、ニコライの夢、ドッドキンの幻覚等の幻想的空間は作者の象徴主義論と深く関わりを持っている。そして、この小説の中で主題と作者の

世界観との関係に糸口を提供してくれるのが第一章の最後の節である。

語り手の逸脱となっているこの節の中心となり、作品の重要なモチーフとなるのが「頭脳の戯れ」である。この「頭脳の戯れ」

には様々な分析が加えられたが、大体において、その背後にはオカルト的力の存在があるということには一致しているようである。しかしながら「頭脳の戯れ」自体が何を意味するのかという問題に対してはまだ十分説明がつけられたとは言えない。語り手はアポローンが「無益なあてどなき頭脳の戯れ」たる作者の想像力の産物であるといっている。しかし作者自身の視点からみれば、この「頭脳の戯れ」は「仮面にすぎぬ」ものである。ベールイは目に見える現実を夢のようなものだと考え、「生の夢を破ることに芸術の目的があり」、創造を通して「唯一象徴」の具現がその目的で、それを成し遂げるのが象徴主義だと述べている。即ち『ペテルブルグ』の中で登場人物たちの置かれている、彼らにとって目に見える現実とは「仮面」のようなものである。「頭脳の戯れ」は世界に対する人間の二元論的認識行為を意味すると考えられる。ベールイは同時代を危機の時代と捉え、それは二元論に起因すると考えた。世界の本質諸矛盾を形骸の創造にあると述べている。このような人間の誤った認識行為の下にいかん悪魔の力が侵入するか、それが人間の運命にいかん関わりを持つかが『ペテルブルグ』の主要な一つのテーマである。

主人公たちも各自、自分の認識行為の土台となるドグマ的精神領域に陥っているが、アポローンはコント主義、ニコライは新カント哲学、ドッドキンはニーチェ哲学に陥っている。これらの三人は、自分たちの幻想的空間の中で、己の「頭脳の戯れ」に侵入した悪魔的力の本性とぶつかる。

アポローンは眠りという旅を通して二つの空間を体験するが、最初の空間は自分の「頭脳の戯れ」が生み出す空間であり、

「第二空間」は最初の空間から無限に拡大していくものであった。彼はそれらの空間の境界となっている「斑点(pjatno)」を越え、そしてその瞬間彼の頭蓋が開かれ、そこからできた廊下を通して深淵に下降するのであった。アポローンはその空間で現在の自分の姿とその自分を威嚇しているモンゴル人に出会う。つまり彼は「第二空間」の中で深淵に沈下することによって己が置かれている現実の下に、即ち「頭脳の戯れ」という仮面の下に横たわっている混沌を見たのである。そこには自分の真の姿、悪魔的モンゴル人の顔、そして彼の運命が象徴的に現われていた。

このような夢は、ニコライの夢においても、シュタイナーの人智学の影響を現しながら展開されている。ニコライの「弱まった考えは、肉体から離れて無益な、無力なアラベスク模様をニコライ・アポローノヴィチに描かせるのであった。」アポローンが「斑点」境界を越えて「第二空間」へ旅立たったことと同様、ニコライも境界アラベスク模様を越えて無益な無限の混沌の深淵でなく、人智学の言う人間の故郷なる宇宙の無限に向かったのである。このことはベールイの人智学の受容を反映している。ところでニコライはそのような幻想的空間の中、父と同様に自分の置かれている現実の本質を見るようになる。このように父子の幻想的空間への旅には現実と幻想的空間との境界を越える行為が伴っている。

ところが、ドッドキンの場合、彼はその境界なる「斑点」を越えることができず、自分の部屋に戻って「青銅の騎士」の息子になってリップンチェンコの殺害に走ってしまう。即ち彼は「青銅の騎士」のパロディ的な姿で破滅しその死体の顔には「斑点」のしみがついたのであるが、これは最

後まで「斑点」という世界を切り放さなかった彼の悲劇を物語っている。

それでは「斑点」に象徴されている境界は何を意味しているのか。それは人智学で言われている、アーリマンが支配する幻影、妄想の世界であると考えられる。このことはドッドキンの幻覚に登場するシンナルフネの言葉からも説明できる。

「頭脳の戯れ」に陥り、自分たちの現実

の本質、ペールイの言う「超越的实在」を悟ることができず、しかもその「頭脳の戯れ」という「仮面」の下に侵入してくる悪魔的力の虜になっている主人公たちの運命が幻想的空間で語られている。そのような空間の描写には人智学の世界観とソロヴィヨフの汎モンゴル主義的終末論が潜んでいる。

清水三三，ロシア留学時代の論文

檜 山 真 一

ハルビン学院，北満学院等で学んだ日本人，朝鮮人，モンゴル人，ロシア人にとって，清水三三（1880—1956）というのは懐かしい響を持った名前であり，伝説的な人物である。伝説的というのはその人柄とロシア語の達人であったという2点においてである。一方，我々には，彼の名前は二葉亭四迷晩年のペテルブルグ滞在と結びついて想いおこされる。しかし，清水三三が教育者として活動した場所が外地であったこと，学問的著作が残されなかったこと等から，彼の名望は限られた範囲にとどまってきた。

清水三三のことは，後藤春吉編『師弟愛は民族を越えて——清水三三——その人と随筆』（1984），清水巖編著『清水の流れ——亡父33回忌，亡母23回忌を記念して』（1987）に詳しい。この2書には，数少い清水三三の遺稿——11編の随筆と回想——が収録されている。従来まったく知られていなかったのであるが，この11編以外に活字になった，それもロシアの教育雑誌に掲載された

小論文がある。本稿ではそのロシア語論文の意義について報告する。

清水三三がロシア語を学ぼうとした動機は不明である。はじめ彼は陸軍参謀本部の委託生として札幌露清語学校で，ついでやはりおなじ資格で東京外国語学校で学んだ。同校卒業後，1年間，参謀本部に勤務。日露戦争中，第1軍司令部付陸軍通訳官として従軍。1906年2月，清水は陸軍参謀本部から2通の電報辞令を受け取っている。1通には「御用有之露国に差遣さる」とあり，もう1通には陸軍参謀総長大山巖の次の3つの訓示が書かれていた。

- 1 露国留学中は一意専心露西亜語の研究に従事す可し
- 1 留学期間は往復日数を除き満3ケ年とする
- 1 一身の進退に関しては在露国公使館付武官の指揮に従う可し

帰国後は，陸軍大学のロシア語教官として迎えられとのことであった。結局，3年